

Weekly Michael's News

<今週の聖句>

「はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」
(新約聖書 ヨハネによる福音書 第12章 24節)

2016年10月3日発行 No.15

<多くの教職員と共に学院創立記念礼拝を挙げる!! 八代学院の原点にあるものとは…?>

先週木曜の午後、チャペルでは学校法人八代学院の創立記念礼拝が挙行されました!! 平日の午後でしたが、多くの参加者が与えられ(その数、昨年の約8倍!! 感謝です!!)、前田理事長の「時代や流行に流されない堅い土台の上に建つ八代学院」を皆で確認する事ができました。



多くの参加者の協力でチャペルも素敵な歌声が響きました!!



聖書を拝読される近藤先生



建学の精神を説かれる前田理事長



礼拝後の茶話会も和やかな雰囲気の中、楽しい会話が飛び交いました



<第一回 映画鑑賞会 in チャペル!! 迫力ある映像と音響にチャペルも震えた!?!>

先週の木曜日は、行事が目白押しでした!! 上記の創立記念の後には、さっとチャペルが模様替えされ、第一回映画鑑賞会が行われました。今回の上映作品は「エクソダス ~神と王~」、これは旧約聖書の出エジプト記をリアルに映像化したものです。セッティングをした私も驚くほど、チャペルの音響効果は素晴らしく、神戸の映画館にも負けない程の迫力でした!! 木曜の午後は、会議の関係で授業が少ない事を生かし、後期はどんどん面白くて有名な作品を上映していきたいと考えています。「木曜午後はチャペルへGO!!」の合言葉をどうぞ覚えてくださいね~!! (^o^)/”



FS 会員の方も多数来場されました!!

<先週のメッセージ>

※ここでは実際に話されたお話の要約を掲載しています

9月26日(月) 前田 次郎(理事長) テーマ:「流れる時と流れない時」

毎日の予定を書き記した手帳を見ていると、自分が「流れる時」の中で忙しく生活している事を強く感じる。もう一方で「流れない時」の存在を、90歳の母を亡くされた男性から頂いた一枚の葉書に感じた。そこには「母がいつも教え、口にしていた言葉が、自分の中で生き活きと蘇ります。その言葉に支えられ、生かされています…。」今日の聖句は、地に落ちた麦が死ぬ事で新しい命への繋がりが生まれている。忙しい世界に生きる私たちも、この言葉を通して主イエスにまみえる時、自分の中に確かな「流れない時」を手にする事ができるだろう。

9月27日(火) 野間 光顕(チャプレン) テーマ:「一枚の絵が語るメッセージ」

この夏、徳島県の大塚美術館でミレーの「落ち穂拾い」にぐっと心を掴まれた。ミレーは、貧しさや妻の死など、苦しい人生を送ったが、それが彼の描く絵画に優しさを与えている様に思う。中央に描かれている3名も、広大な畑の耕作者ではなく、自分の畑を持ってない貧しさの中での生活を強いられている人々だ。当時のフランスには、「収穫後の落ち穂を拾ってはいけない」という貧者を守るルールがあった。この精神は、奇しくも今日の聖句と重なる。ともすれば全てを自分の所に掻き集めようとする今の時代、この絵が語る「不思議な温かさ」の意味を覚えたい。

9月28日(水) 石原 正彦(キリスト教センター主務) テーマ:「神は創造される」

先日、電車に乗っているとキャンプ帰りの子供たちが乗ってきた。楽しかった思い出を話している様子に車内は途端に明るくなったが一方、隣の母親は、スマホの画面を見つめ抱えている赤ちゃんと目を合わせていない。そこに愛情はあるのか…疑問を抱いた。今日の聖書は、神が世界を創造された有名な箇所だ。そこには人間が世界を「支配せよ」とあるが、昨今の環境破壊を見ていると、人間はこの「支配」を読み違えているのではないだろうか? 「創造」には物事を生み育て、企画し、実行する力が求められる。50周年を迎える神戸国際も「創造的」でありたい。

9月29日(木) 岡崎 健介(経済学部1年) テーマ:「平和旅考での出会い」

僕はこの夏に「ヒロシマ平和旅考」に参加した。付属高校の頃から毎年参加していて今回で4回目だったが、大学生として参加した今年は、今までになかった貴重な経験を得る事ができた。特に大きかったのが、平和公園にある韓国人原爆犠牲慰霊碑の存在だ。戦時中日本政府は労働力不足を補うため、多くの朝鮮人が強制連行した。敗戦時、日本には約300万人の朝鮮人がおり、広島にも数万人にのぼる朝鮮人が被爆された。今回の平和旅考で原爆により外国人も犠牲になった事実を初めて知った。真の世界平和を実現するため、私たちは原爆の事実を後世にも伝えていきたい。



9月30日(金) 中原 康貴(チャプレン) テーマ:「静かに自分を見つめる」

砂漠の賢者の言葉「器に水を勢いよく注ぐと、水は波打つ。しかし、しばらくすると波は治まり、鏡のように人の顔を映し出してくれる。このように、人はどんなに良いことをしていても、動き続けていたら、そのうち自分を見失い、遂には疲れ果ててしまう。だから、時には静かに自分自身を見つめる場が必要である。」昼の礼拝の15分がこの大学に関わるすべての人にとって、自分自身を見つめる時間となることを私たちは願っています。

(文責:野間光顕)